Row row row your boat

群　青

ろうろうろうゆあぼおと　じぇんとるだうんざすつりーむ
めりめりめりめりめり　らいふいずばったどぅりーむ
ろうろうろうゆあぼおと　じぇんとるだうんざすつりーむ
めりめりめりめりめり　らいふいずばったどぅりーむ

女は慌てている
簡潔な仕事ぶりだった
一撃で男は死んだ
ボルドーの1998年ものが

右の頭にのめり込んだ
男は醜悪な目をいっそう見開き
ボトルをちらっと見上げ
目の玉を上転させた

だが女は動揺している

まだ男がいた
動かない男が天井を見上げ
両手を大きな蘭の花びらのように開き
舌をひらひらさせて
いや
裏側を見せて舌がめくれ
息を止め
死んでいた

だが
男がいる
消えず目の前にいる

帰りが遅くなるとぶった
すこしでも酔っていると
押し倒された

男は深夜まで
怒鳴った嘲笑った
猛り狂った
スマホを投げた
女の横にもぐりこんできて
泣き寝入りした

女はテレビと赤ワイン

男が不意に叫んで背中からぶつかり
倒れた女の腹に膝をのめりこませ
あたまを何度も殴った
顔をやっと上げた女の首に腕を巻つけ
激しい力で、乳を掴んだ
うめく女を床にうちつけた
ワインが目の前にこぼれた

そのあと男の部屋から大笑いが聞こえていた

女は男を哀れみはじめた
男はますます幼稚で粗暴になった
女の目はガラス玉
男の目はトンボの目

女の期待は擦り切れて
男の望みは枯れ果てて
ふたりは目を合わさない
ふたりはふとんのなかで泣いている

ろうろうろうゆあぼおと　じぇんとるだうんざすつりーむ
めりめりめりめりめり　らいふいずばったどぅりーむ

ぶろうぶろうゆあぼでぃ　じぇんとるういずすくりーむ
めりめりめりめりめり　らいふいずばったどぅりーむ

男の胴体が電車の線路の脇で朝焼けの空を見ていた
背中がこわばって曲がっていて
驚いて女を見上げた時のまんま
コンクリートの上でシーソーのように揺れた
肩にぽっかり空いたくぼみを
湿った風が通る
両腕が生え出しそう

あわてた女はスマホで学んだ
指示通りに男の死体を切り離した
腹と臍を雨の前の重い風が撫でる

下腹は海に沈めた

台車を押す
女は絹の夜着の上にカシミヤのコートをはおっている
ダイヤをはめ込んだスクエアー型の腕時計をするのは癖
ごみ捨ては男の仕事だったのに
女は慣れない早朝仕事
公園の植え込みに右足を置く
目の前の豪華なお屋敷の屋根の上から朝日が射してきた
時間が経った
だが、だれとも会うことはなかった
手早く左足を反対側の植え込みの中に置く
神社の坂をのぼりきった木の陰に腕
すぐ近くのお寺の墓地にシーツに包んだ首

女は御影石にむかって手を合わせる
台車はお堂の縁の下に滑らせた

雀の声がしていた
とても明るい朝だった

傲慢でもきりりとしといてよ

毎日何やってたのよ
女は身代わりなんかまっぴらと思う

起きあがろうとしてあげかけた男の頭に
思いっきり女はワインボトルを打ち下ろした
瓶は割れずに男の頭にめりこんだ
もう一度殴ろうとしたが瓶があたまから離れなかった
両手でやっとひっぺがした
男は動かなくなった

自分を見失って襲いかかる男を
女は成敗した
終わった
すべて終わった

女は気を強くもって男をにらみ続けた
瓶を手放さなかった
外の通りの音が急に耳のなかに飛び込んできた
両手で瓶を握りなおした
男の肩をつついた
目は閉じられていた
左目の上の大きなくぼみに黒い血がかたまっていた

突然クラクションが聞こえた
思わず、瓶を打ち下ろそうとした
女は雨に濡れた舗道にいた
車のヘッドライトが交錯し
すべての光が、ゆっくりと女に近づいた
女は瓶をたかだかと頭の上にかかげ
光に向かって立っていた

わたしは恥じることはないと叫んだ

ジャック・プレヴェールに教わったこと
祝言として

八つ裂きになったオリオン
電気をかけられたアンタレス
鉄の玉で打ち砕かれたアルデバラン
ミサイルの刺さったままの北極星
ラッカーを塗りたくられたよだかの星
うようよと
難民となって
星たちが
落ちてくる

賞味期限終了宇宙船
使用済み核弾頭原子力宇宙船
置き去りの宇宙飛行士
閉まらないアンテナ
外れたドア
磨かれた無重力窓

ヘルメット
酸素ボンベ
穴あき宇宙服
釘やねじや金属板
紐や電線や
便器や食器や栄養チューブや
下着や髭剃りやら
が
落ちてくる
目玉も骨も
落ちてくる

表彰状や
ノーベル賞が
落ちてくる
落ちて地球に戻って
もう一度芽を出そうとしている

通りは車が使えない
金持ちも長生きできない
走り出す
朝の放射能シャワー
免疫細胞に鞭をいれる

文化人知識人ブルジョワジー労働貴族の男女が
走っている
ヴィトンの手鞄から
宝石や犬猫のミイラをこぼして
走る
法律をわんさと作っても
安全じゃないなんて
なんでこんなになったのよ
ぶつぶついって
一所懸命に走る
走り続けて
あの頃を思い出す
あとのことはどうでもよろしい
果ての果てまで走り続ける
今
生きてこそ
生きてこそ
快楽こそ
必須

父親は独演
母は説諭
息子は斉唱

娘は祝詞
じいさまとばあさまは読経

父親は抗がん剤
母親はレジ
息子はスマホ
娘はスマホ
じいさまとばあさまは読経

父親にはなれない
母親になっちまった
息子は派遣
娘はおむつ替え
じいさまとばあさまは読経

父親は攻撃
母親は威嚇
息子は飛ぶ
娘は撃つ
じいさまとばあさまは読経

みんなで戦争している

夜も果てる
ひとり酒飲む
いつまでも盡きない
飲めど変わらぬ
むごき世の
傾き戻らぬ道の端
足もよろよろと
夢の枕に臥すと
山の泉も涸れて絶え
醒めてなにがある
飲んでなにがある

風はすさみ
恵みも乏し枯れ草の
恵みも乏し枯れ草の
露も時雨もただ寒く
四方にあせたるもみじの葉
松も食われて色もなく
戦の車の列長き
戦の車の列長き

すたれる国のあかしも今更に
この世のあかしも今更に

見るも荒れ
雨も時を違え
愚かなるうえつひとら
ちとせをかけての注連縄は
すたれて朽ちて失せ去りぬ

われら
されど
おおらかに伝えきた笛竹の
喜びなれや
この結び
思い熱く
海山に
野に町に
民は久しく
民は久しく

（謡曲・猩々、花筐、鱗形、われら、に拠った）

しんらんこいうた

子がほしい
子はいらぬ
子がほしい
子はいらぬ
ゆるゆる流れ
流れにまかせ
ゆるゆる
小蛇の群れが首をもたげ
寄せてくる
ひき攣り
髪の毛総立ちの
あたしの目を拝み

成り行きは
優しい綿毛のよう
豆鞘の乳色のよう
やわらかい

ここちよい肉

流れ
流され
溶け
蜜にのまれ
もてあそばれ
ああ
あんなに空が広い
とろとろとろとろ
青い高みに近づいたり離れたり
とみるまに
落ちる
落ちて
水にのまれ
甘い
甘い
においも
味も
花芯のなみだに
からみ

無数のきらめき

無数の花びら
つつまれ
ころがされ
ひろがり
ひろげられ
とろけとろとろ
滝を滑り
溶け
花となり

子がほしい
子はいらぬ
子がほしい
子はいらぬ

愛欲ふつふつ
いき吹き返し
くるくる回る
回りまわって
魚になって
滝つぼに
まかせ
するりと皮膚を脱ぎ

脱いで流れにまかせ

ああ
そこにおわすは
まだ目もあかぬ
びんずるさま
いとおしや
一身肉色なめらかに
びんずるさま
からだのまんなかを
いきつもどりつなさるも
いとおしや
口をつく
吐息
吐く息
ただ熱く
どうにでも
びんずるさま

魚であるのか
おんなであるのか
なみあみだんぶ
かわいいわが子を産みおとそうか

捨ててしまうか

あんたは遠い
おとこが遠い
地の果てまでも遠い
ひとり
あたしから
はじまる
おんながはじまる
あたしが
はじまる
おんながはじまる